参考資料２

春日山原始林保全計画（案）
平成 28 年 1 月版

春日山原始林の保全の基本方針及び保全方策

該当箇所抜粋

奈　良　県

－ 目 次 －

序．はじめに……1
１．計画策定の背景と目的……1
２．計画の対象範囲……1
３．検討体制及び経過……2
第Ⅰ章．春日山原始林の沿革……7
１．近世以前……7
２．奈良公園の開設以降……10
第Ⅱ章．春日山原始林の現況と課題……17
１．現況……17
１－１．位置等……17
１－２．関係法令……18
１－３．特質……21
１－４．現地調査結果……38
２．課題……52
第Ⅲ章．春日山原始林の保全……61
１．保全にあたって……61
２．保全の目標値……62
３．保全の基本方針……69
３－１．保全の目標……69
３－２．保全の基本的な考え方……70
４．保全方策……71
抜粋箇所
第７回検討委員会の指摘事項及び第８回検討委員会の議事を踏まえた修正箇所は赤字
５．実証実験の実施
第Ⅳ章．運営及び体制
第Ⅴ章．今後の課題

３．保全の基本方針

３－１．保全の目標

春日山は、古くは承和８年（841）に狩猟と伐採が禁止されて以来、春日大社の神山として大切に守り育まれてきた。明治 22 年（1889）に奈良公園へ編入されて以降も、都市近郊で原生的な状態を維持する貴重な照葉樹林であるとの評価を受け、大正 13 年（1924）には天然記念物の指定、昭和 30 年（1955）には特別天然記念物の指定を受け、文化財としても保全が図られている。

また、春日大社の社殿周辺から御蓋山、さらには春日山原始林へと鬱蒼と広がる森林は、古くから「神鹿」として古文書や伝承に登場する天然記念物「奈良のシカ」と同様に、日本人の伝統的な自然観と深く結びつき、自然と社殿が一体となった大社の文化的景観を構成する不可欠な資産として、平成 10 年（1998）に世界文化遺産「古都奈良の文化財」の一部に登録されている。

このように、自然的にも、歴史文化的にも貴重な価値を有する春日山原始林を次世代へ継承していくため、本計画では、概ね 100 年後に春日山原始林をあるべき姿に戻すことを目標に、計画的に保全方策を実施することで、春日山原始林が抱える課題の解決を図る。

春日山原始林の保全の目標

古都奈良の貴重な財産である春日山原始林の持続的な森林更新を促し、

人やシカとも共生できる森林を保全することを目標とする。

図 43　若草山山頂から春日山を望む

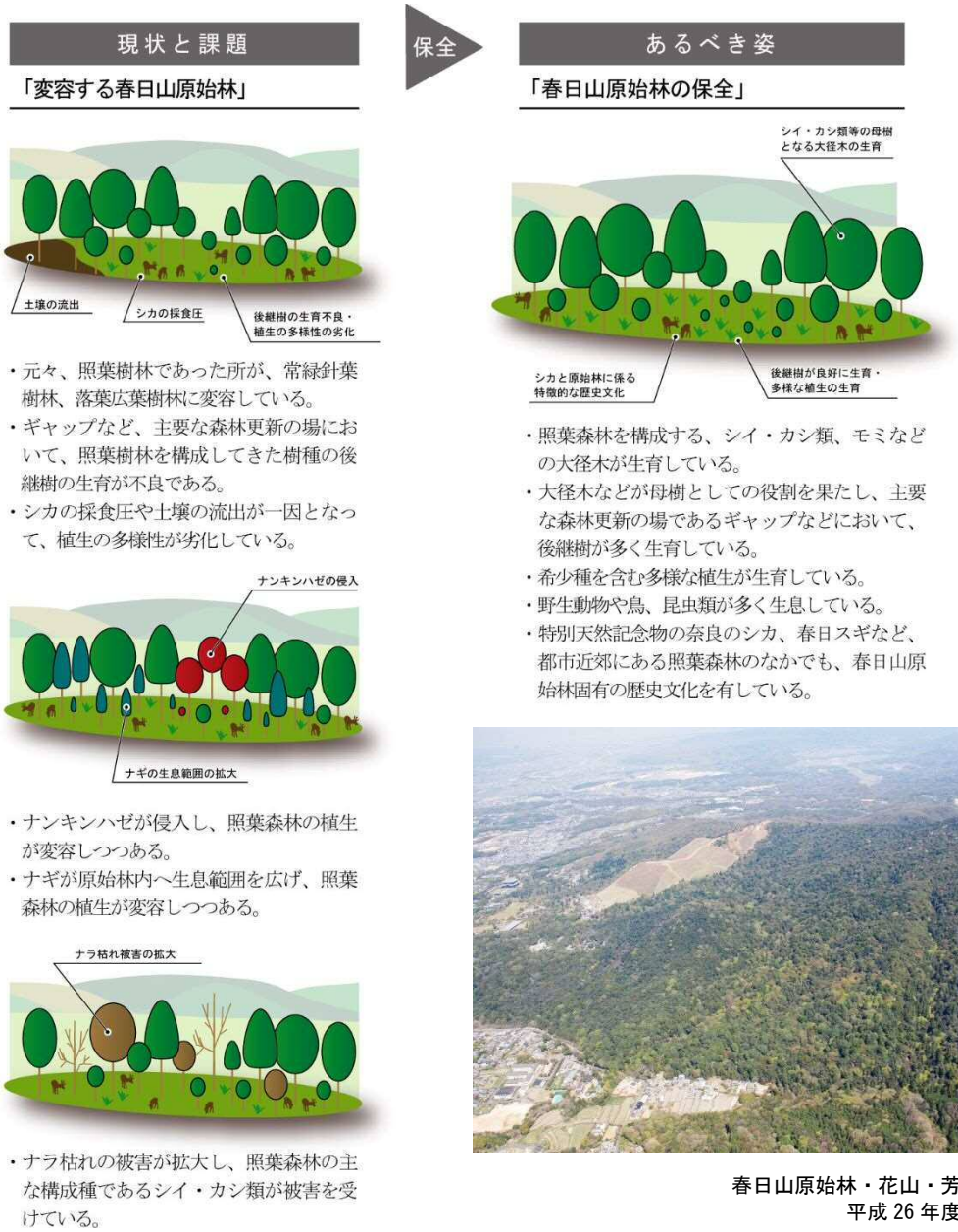
出典：奈良市「世界遺産　古都奈良の文化財」平成 11 年（1999）, 30 頁

３－２．保全の基本的な考え方

本計画では、春日山原始林を本来あるべき姿に戻すことを目標に、次世代に向けて、現在残されている照葉樹林を保全することを基本的な考え方とする。

なお、ナンキンハゼの侵入やナギの拡大、ナラ枯れ被害など、春日山原始林が直面している課題を解決し、照葉樹林が自律的に元の姿に戻っていくことを維持・支援する必要がある場合は積極的に取り組みを行っていくこととする。

保全	・現在残されている照葉樹林を良好な状態で維持するための取り組みを行う。 ・必要に応じて、照葉樹林が自律的に元の姿に戻っていくことを維持・支援するための取り組みを行う。



春日山原始林・花山・芳山地区人工林
平成 26 年度撮影（2014）

図 44　春日山原始林の保全のイメージ

４．保全方策

春日山原始林の保全方針に基づき、現在、春日山原始林が抱える課題解決に向けて、以下の 10 の保全方策を実施する。

春日山原始林の 10 の保全方策

（１）照葉樹林を良好な状態で維持する保全方策を実施する

（２）照葉樹林の多様性を維持する保全方策を実施する

（３）後継樹を育成し文化財としての価値を修復する保全方策を実施する

（４）ナンキンハゼの侵入を抑制する保全方策を実施する

（５）ナギの拡大を抑制する保全方策を実施する

（６）ナラ枯れの拡大を抑制する保全方策を実施する

（７）花山・芳山地区人工林の保全・利活用を実施する

（８）保全事業の執行体制を確立する

（９）多様な主体の参画を図る

(10) 春日山原始林に関する基礎情報のマネジメントを図る

（１）照葉樹林を良好な状態で維持する保全方策を実施する

照葉樹林の後継樹が生育するギャップ並びに大径木周辺において、シカをはじめとする野生動物による食害を緩和し、原生的な森林を保全するため、植生保護柵を設置する。

・春日山原始林では、照葉樹林の優占種であるカシ類・コジイの後継樹の生育が不良であり、その多様性が劣化している。耐陰性に優れるアカガシの実生や幼木が少ないことなどから、シカをはじめとする野生動物の食害が後継樹の生育に影響していることが懸念されるため、植生保護柵を設置し、照葉樹林の保全を図る。
・林冠に隙間ができ、林床への光条件が良いギャップは、周辺の大径木などから種子が散布され後継樹の生育が期待できる。このため、主要な森林更新の場となり得るギャップに、優先的に植生保護柵を設置する。
・植生保護柵は小規模（30～40m四方程度）を標準とし、その設置方法や仕様について、春日山原始林の保全を目的に実施する実証実験の成果を踏まえながら、適切な保全方策を検証する。

写真：カシ類が優占する林分

カシ類・コジイが優占する
照葉樹林の保全

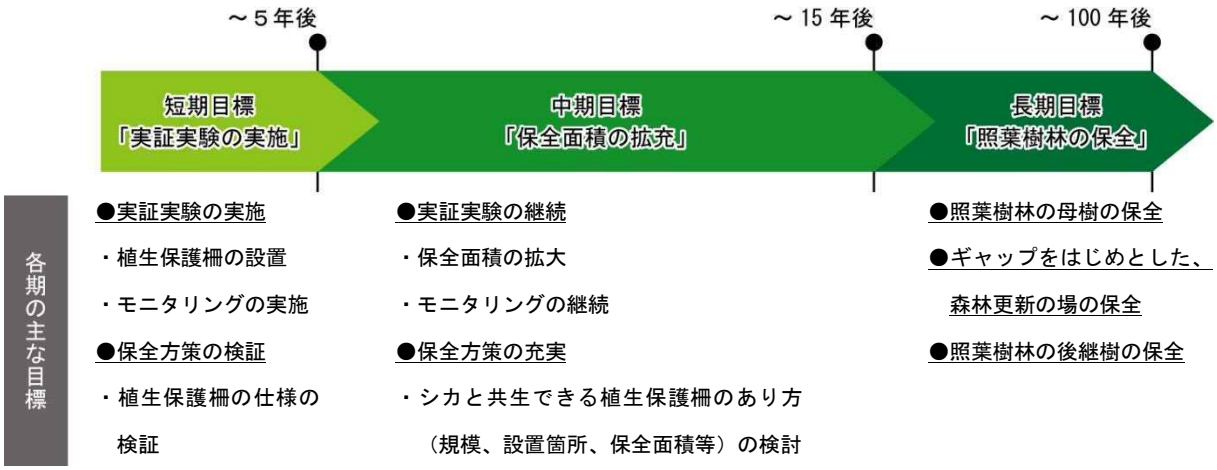
写真：ギャップに設置した植生保護柵

主要な森林更新の場としての
役割を担うギャップの保全

写真：植生保護柵内に生育するコジイ実生

野生動物の食害緩和による
後継樹の保全

【実施スケジュール】



（２）照葉樹林の多様性を維持する保全方策を実施する

照葉樹林の後継樹とともに、着生植物や下層植生を含む多様な植生が生育できる環境を保全するため、植生保護柵を設置する。

・春日山原始林は、着生植物、シダ類、コケ植物などの多様な植生が生育していることが評価されている一方で、土壌の流失や野生動物の食害等により、その多様性の劣化が確認されている。
・野生動物による採食圧が高い森林において、下層植生の多様性の劣化を防ぐためには、劣化が確認された 10 年以内に保全方策を実施する必要がある。
・春日山原始林では植生保護柵を設置し、ギャップや大径木周辺に生育する照葉樹林の後継樹とともに、着生植物や下層植生を含む多様な植生が生育できる環境を保全することで、植生全体の多様性の維持を図る。

写真：奈良県版レッドデータブックに記載される絶滅寸前種　ホンゴウソウの生育

希少な植生の保全

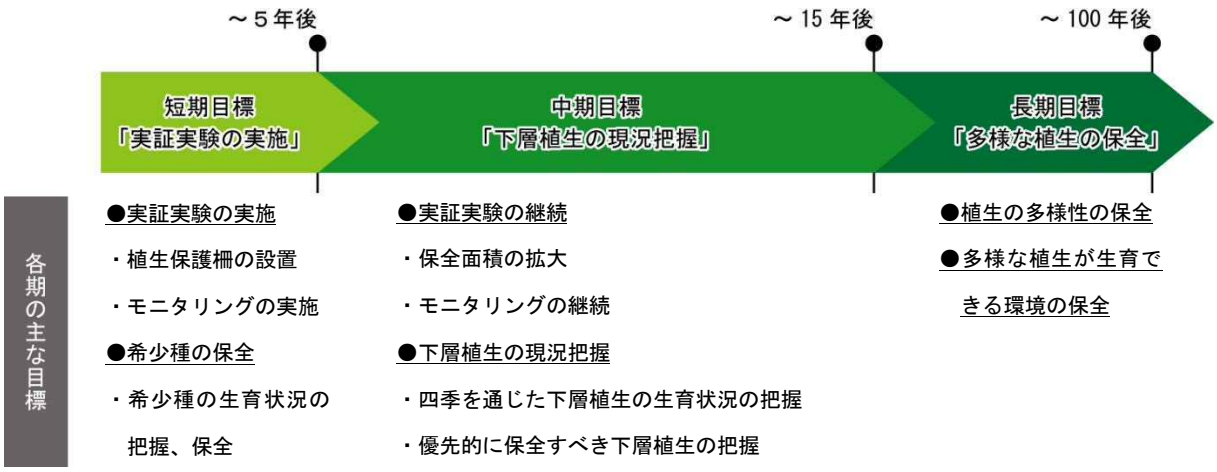
写真：植生保護柵内に群生するクリンソウ

植生保護柵内での下層植生の群生

写真：下層植生の減少が一因となる土壌流出、それに伴う下層植生の生育基盤の悪化

生育基盤となる林床の保全

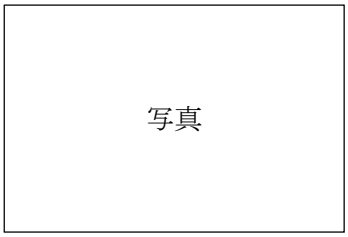
【実施スケジュール】



（３）後継樹を育成し文化財としての価値を修復する保全方策を実施する

大径木の種子を採取し遺伝資源を確保するとともに、原始林の価値を修復するために必要最低限の箇所へ、原始林内で採取した種子から育苗した苗木を補植する。

・原生的な照葉樹林の遺伝資源を有し、且つ、母樹としての役割を果たす大径木のうち、ナラ枯れ被害等の複合的な理由により倒木、枯死する個体が確認されており、文化財としても、学術的にも評価の高い遺伝資源を損ないつつある。また、大径木が倒木や枯死により形成したギャップでは、種子散布が減少するだけでなく、シカをはじめとした野生動物による後継樹への採食、ナンキンハゼの侵入等により、将来にわたり照葉樹林を維持することが困難な状況にある。
・このため、大径木の種子を採取し、遺伝資源のシードバンクを確立する。
・その種子から苗木を育成し、大径木が倒木や枯死により形成したギャップ等、照葉樹林を維持するために必要最低限の箇所へ適切な方法で苗木を補植するとともに、野生動物による後継樹への影響を緩和するため、優先的に植生保護柵を設置する。
・苗木の育成は、原始林に隣接する花山・芳山地区人工林の活用を検討する。

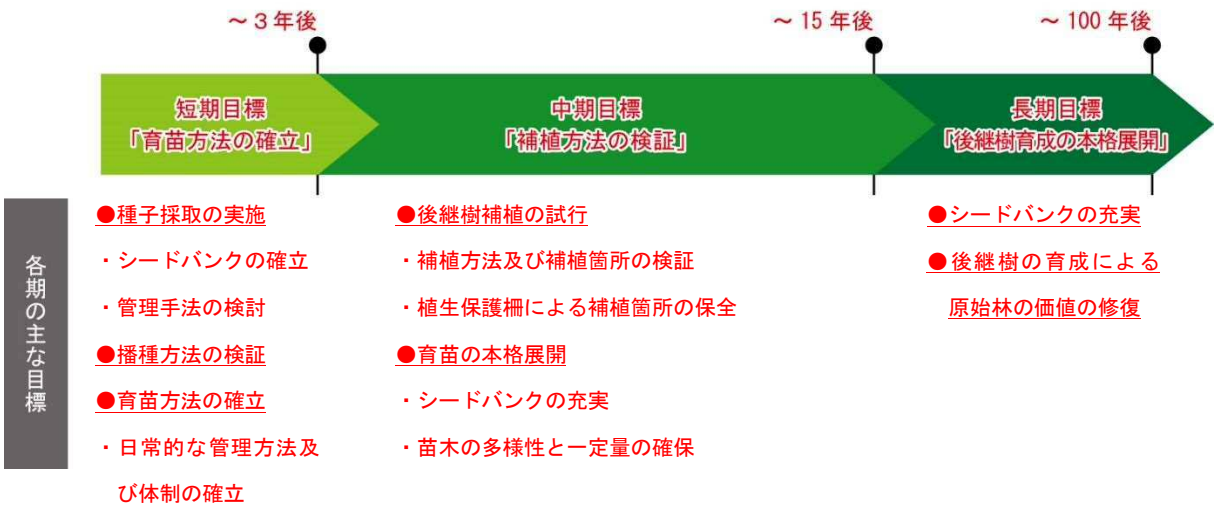


写真：ナラ枯れ被害等により枯死したコジイ大径木
原生的な照葉樹林の
遺伝資源を有する大径木

写真：大径木周辺に散布された種子
照葉樹林の後継樹になり得る種子

写真：植生保護柵内に生育するコジイ実生
花山・芳山地区人工林の苗場

【実施スケジュール】



（4）ナンキンハゼの侵入を抑制する保全方策を実施する

春日山原始林での外来種であるナンキンハゼの侵入を抑制するため、具体の駆除方法を検討し、原始林への極力影響を与えないよう配慮の上、駆除作業を実施する。

・春日山原始林では、外来樹であるナンキンハゼの侵入が確認されている。鳥散布でその生息範囲を広げるナンキンハゼは、特にギャップに多く侵入し照葉樹林を構成する植生に影響を与えている。
・原生的な森林を保全するためにも、ナンキンハゼを駆除する必要があるが、駆除作業の内容によっては原始林への影響も懸念されるため、実生、幼木の段階での駆除が重要である。
・春日山原始林へのナンキンハゼの侵入を抑制するため、ギャップを中心とした巡視、伐採、萌芽更新対策等、具体の駆除方法を検討し、駆除作業を計画的に実施する。

写真：ギャップに侵入しているナンキンハゼ

ナンキンハゼの駆除

写真：林床に生育しているナンキンハゼの実生

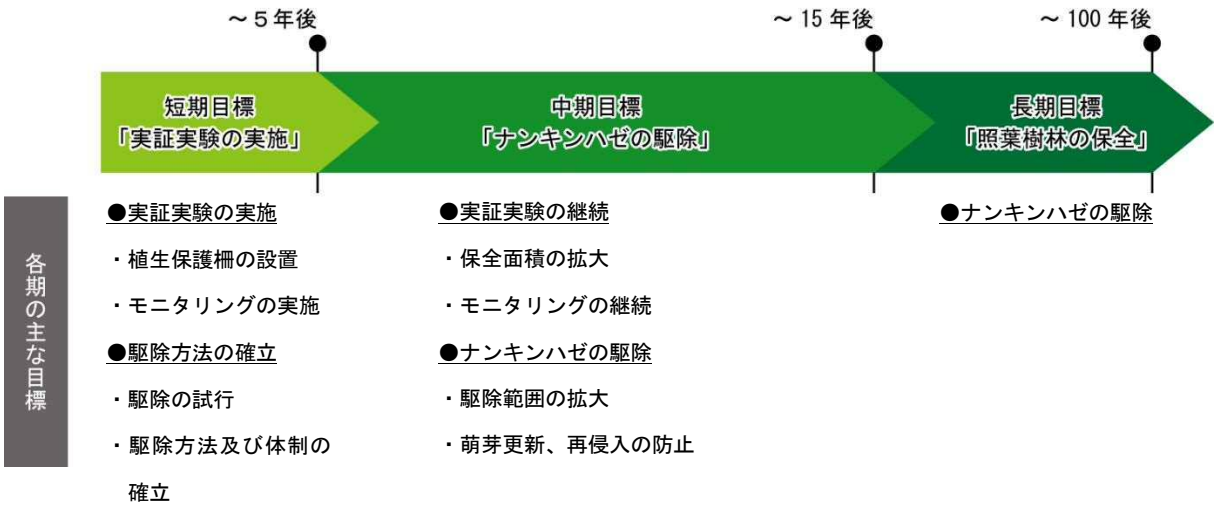
ナンキンハゼの生育範囲の拡大防止

写真追加

写真：ナンキンハゼを駆除する林分に設置した植生保護柵の設置

植生保護柵の設置による
駆除後の後継樹の更新の誘導

【実施スケジュール】



（５）ナギの拡大を抑制する保全方策を実施する

春日大社とナギの歴史的背景に十分留意し、原始林内に樹勢を拡げたナギについては、やむを得ず拡大を抑制する必要があるため、ナギの数量調整を実施する。

・1200 年以上前の春日大社の創祀の時期に神木として献木されたことが契機となるナギは、榊の代わりに神事に用いられた神聖な木であり、神域の春日大社境内の御蓋山一帯において常緑針葉樹林であるナギ林を形成している。
・その一方で、照葉樹林の優占種であるカシ類・コジイに比べて、ナギは耐陰性が強く寿命が長いため、原始林内へ生息範囲を拡げていることから、照葉樹林の植生が変容しつつある。
・春日山原始林を保全するため、ナギの原始林内への生息範囲の拡大をやむを得ず抑制する必要があると考え、ナギの数量調整を行うこととする。
・数量調整したナギの一部については、春日大社の神事等、再利用のあり方を検討する。

写真追加

写真：春日大社境内御蓋山に生育するナギ

写真：実証実験箇所におけるナギの数量調整

写真：萌芽更新の防止

ナギの歴史的背景への留意

原始林内におけるナギの数量調整

原始林内への拡大抑制

【実施スケジュール】

（6）ナラ枯れの拡大を抑制する保全方策を実施する

ナラ枯れの拡大を抑制し春日山原始林を保全するため、大径木等、重要な樹木への予防措置をおこなうとともに、ナラ枯れ被害木の早期発見・対策を実施する。

・春日山原始林では、近年、全国の森林で被害が報告されているカシノナガキクイムシが媒介するナラ菌による樹木の集団枯死、いわゆるナラ枯れの被害が深刻化している。
・ナラ枯れは、被害の拡大が速いため、照葉樹林の母樹としての役割を担うカシ類・コジイ大径木など、春日山原始林にとって重要な樹木がナラ枯れの被害を受けないように予防措置を行う必要があるとともに、ナラ枯れの被害が確認された場合は、被害拡大を予防するために迅速な対策が必要となる。
・このため、ナラ枯れの拡大抑制に迅速に対応できる体制を構築し、被害状況の定期的な巡視、その結果を踏まえたナラ枯れ被害の予防措置、カシノナガキクイムシ駆除措置等、ナラ枯れ対策の最新の情報収取に努め、保全方策を効果的に実施する。

写真：原始林内に拡大するナラ枯れ

ナラ枯れ被害の拡大防止

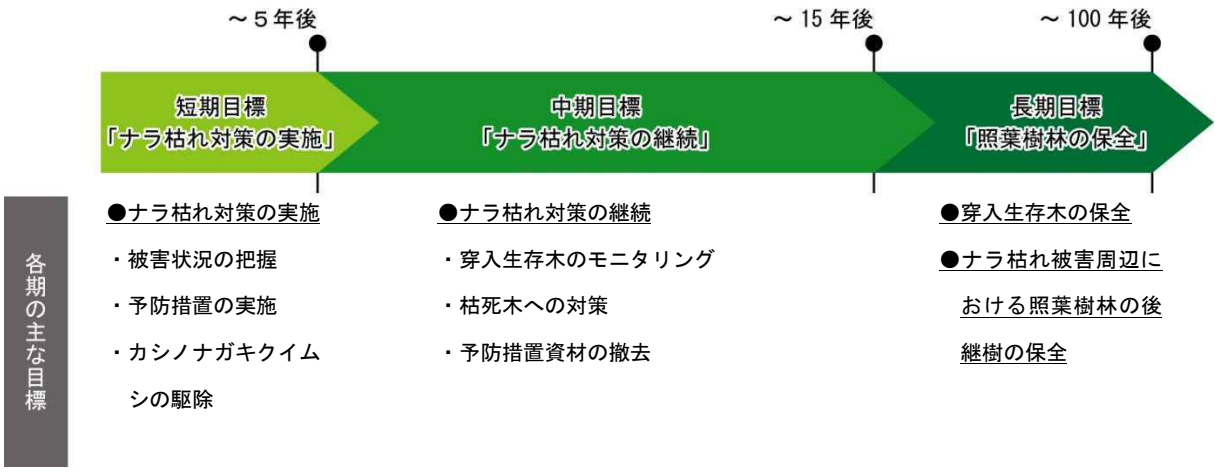
写真：防虫ネット被覆による大径木への予防措置

ナラ枯れ被害からの重要な樹木の保全

写真：ペットボトルトラップによる
カシノナガキクイムシの駆除

カシノナガキクイムシの駆除

【実施スケジュール】



（７）花山・芳山地区人工林の保全・利活用を実施する

春日山原始林の緩衝帯として、また、春日山原始林と一体となり風致景観を形成する森林として、花山・芳山地区人工林を保全するとともに、その森林資源の利活用を通じて、春日山原始林の保全事業の推進を図る。

・春日山原始林に隣接する花山・芳山地区の人工林は、明治期に奈良公園が開設されて以降、公園管理・整備費を捻出するための経済林としての役割を担ってきた。
・その一方で、大正・昭和期にかけて発生した風倒被害や森林火災から、春日山原始林を守る緩衝帯としての役割を担い、現在もなお、春日山原始林と一体となり奈良公園の背景となる緑豊かな風致景観を形成している。
・また、明治末期以降に造林した人工林が面的に成林し、檜皮や間伐材等の森林資源を有していることから、県内木造建造物への修理資材など、森林資源の利活用を図っている。
・このため、春日山原始林の保全事業の一環として、花山・芳山地区人工林を適切に管理・育成するとともに、その森林資源の利活用を行うことで、事業全体の更なる推進を図る。

写真：昭和 36 年（1961）第二室戸台風による風倒被害地への再造林

春日山原始林を風倒被害等から守る
緩衝帯機能の強化

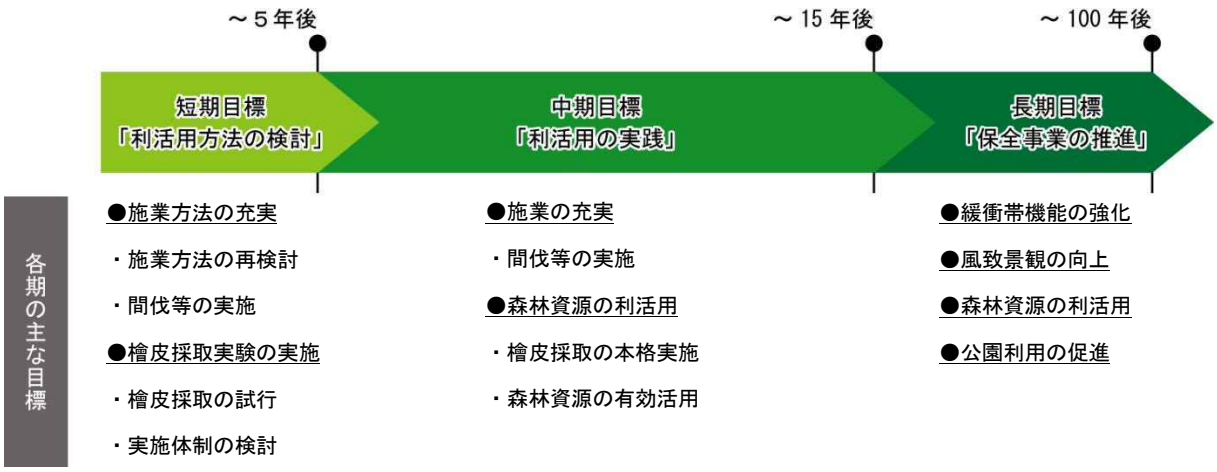
写真：100 年生以上のヒノキ高齢林
平成 27 年（2015）現在

春日山原始林と一体となる
風致景観の維持向上

写真：檜皮採取実験の実施

文化財修理資材確保をはじめとした
森林資源の利活用

【実施スケジュール】



（８）保全事業の執行体制を確立する

奈良公園及びその周辺地区において関係者間の連携・協力を進め、全体として春日山原始林の保全事業に取り組む。

・広大な春日山原始林を保全するには、保全計画に基づき保全方策を着実に執行できる体制づくりが必須である。特に、春日山原始林の歴史文化を踏まえると、人やシカとも共生できる森林の保全に向けて、管理主体である県を中心に、多様な関係者との連携・協力、他計画との調整が必要となる。
・このため、短期目標として「県が主体となり多様な関係者が連携・協力できる仕組みづくり」を行い、「その仕組みを基盤に保全事業を運用する」ことを中・長期目標とする。

（９）多様な主体の参画を図る

保全事業の継続性を担保するため、多様な主体の参画を図るとともに、春日山原始林の保全を目的とした基金等を活用し、財源の確保に努める。

・広大な春日山原始林を保全するには、前述した仕組みへ、県民をはじめ、春日山原始林の保全に関心のある活動団体など、多様な主体の参画を促し、保全事業の活性化を図る必要がある。
・このため、「森林に関する有識者や研究者、ＮＰＯ、活動団体等と連携・協力し、将来に渡って保全事業の担い手として活躍できる人材育成を図る」ことを長期目標とする。
・また、「春日山原始林の保全を目的とした基金を財源として、保全事業の継続性を担保する」ことを長期目標と位置づける。

（１０）春日山原始林に関する基礎情報のマネジメントを図る

春日山原始林に関する基礎情報の一元化を可能とするデータベースを作成するとともに、その充実とマネジメントを図る。

・保全事業を効果的かつ効率的に実施していくためには、大径木及びギャップの分布状況、実証実験のモニタリング成果等の基礎情報を点から面、さらには時間軸も考慮し、円滑な情報公開・発信、活用ができる環境整備を進める。
・このため、短期目標としては、「航空レーダー測量等の技術を活用し、基礎情報の一元化を可能とするデータベースの作成」を行い、「データベースの充実・マネジメント」を長期目標と位置づける。